

メガホンの話



なぜメガホンと呼ばれるのか？

メガホンは一番身近な拡声装置でしょう。「メガホン」は「Megaphone」であり、そのまま訳すと「すごく大きい音声装置」となります。最近ではパソコンやハードディスクレコーダーでメガバイトという単位を耳にするようになりましたが、「メガ」の次に大きいのが「ギガ」でその次が「テラ」です。それ以上は「ペタ」、「エクサ」、「ゼタ」、「ヨタ」と続きます。そういう意味でメガホンの大きいのは「ギガホン」になるのかなと考え、次に企画する大きなメガホンは「ギガホン」という名前にししようと言ったことがありました。その後何年かが過ぎ、たまたま「ギガホン」でインターネットを検索したら某メーカーさんの小型拡声装置の紹介ページにジャンプしました。やはりこのネーミングは狙われていたようです。さすがに「テラホン」は商品名として出てきませんが、そのコメントを書いている個人のページもありました。今のうちに登録しておいた方が良いのかもしれませんが・・・

何故メガホンと呼ぶのかという話でした。

メガホンのハウリングについて

前回ハウリングのメカニズムについて説明しましたが、メガホンはPAシステムとかSRシステムとか関係なく、同じボディにすべてのシステムが詰まっています。つまり、マイク、アンプ、スピーカーのすべてが揃っている状態で、一番ハウリングしやすい機械です。メガホンがハウリングし始めるのが早く、フルパワーを出すことができないという相談があります。これは当社の設計コンセプトであり他社と違う特徴ですが、なぜそうしているのかをご説明致します。

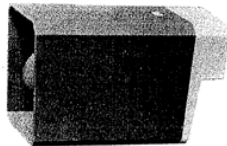
メガホンは乾電池を使います。当然、使ううちに乾電池はだんだんとパワー(電圧)が落ちてきます。同じくメガホンのパワーもダウンすることになりますが、いままでハウリングしていたボリュームの位置へツマミを廻すことができ、引き続き最大のパワーで使う事ができるということになります。他社のメガホンではボリューム位置が最大でハウリングしない設定なので、そこからは電池と共にメガホンパワーは落ちて行くだけです。メガホンでハウリングするというのは最大のパワーが出ている状態です。当社のメガホンは少しでも最大パワーを長く維持できるようにツマミの設定を考えています。

昭和39年頃の製品



どのメガホンよりも！
● 小さく・軽い
● 最も低価格
¥4,800
(乾電池付)

メガベツト



型名	PM-77
実効到達距離	70m
内蔵アンプ出力	TR3石 定格0.8W 最大1.2W
乾電池電圧	UM-3×6個12V
乾電池使用時間	のべ18時間
消費電流	定額出力時 150mA 最大出力時 180mA
口徑 / 全長	98×68mm / 170mm
重量	490g (乾電池ナシ)

昔のTRC-3W

左図は昭和39年の弊社製品カタログに掲載されていたメガホンです。現在のTRC-3Wのコンセプトが既にこの時代にあったようです。またアンプを使わない(電池不要)メガホンも当時存在したそうです。圧電マイクとトランスとドライバユニットの組み合わせで構成されていたのですが、残念ながら資料は発見できませんでした。そんなに大きな音が出るはずもありませんが、本当に製品化されていました。